記　入　日　　2015 年 1 月 13 日

１．概　要

実践団体名	埼玉県立日高特別支援学校		
連絡先	校長　桑原　智子　　042-985-4391		
プランタイトル	日高特支　車椅子の子どもたちを守る！防災力向上計画		
プランの対象者※1	８・９・１０・１４・１７	**対象とする災害種別**※2	１・８（竜巻）

※1　別紙「記入上の留意点」の1．項目から選択し、記入してください。（複数選択可）
※2　別紙「記入上の留意点」の2．項目から1つ選択し、記入してください。

【プランの目的・ここがポイント！】

１．　本校児童生徒への防災教育の充実
２．　保護者・地域との連携
３．　教職員・保護者の防災力向上

肢体不自由校の防災教育は実践数が少ないのでまだまだ手探りですが、本校の試行錯誤しながらの実践や反省も含めて参考になると思います。

【プランの概要】

肢体不自由の子ども達を対象にした防災教育。緊急地震速報を用いたショート訓練を中心に児童生徒や教職員にどのような場面でも身の守ることができるように取り組んだ。その積み重ねにより確実に成果は上がってきている。職員研修を充実させ、自分達で考えることで児童生徒を守る方法や防災について指導する方法について具体例を挙げた。実態に応じて教科学習や自立活動の場面で指導し、児童生徒自身で考える機会を作った。保護者と共に計画して防災体験プログラムを行った。震災を体験した医師の講演会や、消防署や防災士、県の炊き出し応援の支援を受けてこれまでに車椅子の子ども達が体験しにくかった防災訓練を楽しみながら行うことができた。これにより保護者の防災意識を高めることができた。

【期待される効果・ここがおすすめ！】

・避難訓練は実施時間や気候の制約を受けやすいが、緊急地震速報を用いたショート訓練は退避行動の確認なので様々な時間や場面で実施可能である。積み重ねることで防災意識を高めることができ、実際の地震でも落ち着いて対応することができた。
・防災に関心をもつきっかけとして防災体験プログラムを実施した。災害時の困難について、スタンプラリー形式で家族共に楽しみながら体験し、家庭での防災意識も高まった。
・主体的に取り組めるような職員研修を実施したことで本校の防災教育へ繋げることができた

２．プランの年間活動記録（2014 年）

※毎月　防災部便り発行・防災部コーナー掲示

	プランの立案と調整	準備活動	実践活動
4 月	避難訓練		職員防災研修（校内ＤＩＧ）
5 月	防災体験プログラム	水消火器体験用的あて製作 防災体験プログラム打ち合わせ	災害用伝言ダイヤル体験 全校集会にて一斉指導 ショート訓練　避難訓練
6 月	防災アンケート	防災アンケート作成	ショート訓練 校内ＤＩＧまとめ校内掲示
7 月	職員防災研修	防災体験プログラム製作準備	伝言ダイヤル体験 ショート訓練 県内校にアンケート配布
8 月		アンケート集計 職員防災研修	防災体験プログラム 職員防災研修（竜巻・指導法他）
9 月	引渡し訓練	職員防災研修　指導方法まとめ	伝言ダイヤル体験 ショート訓練・実施指導案配布
10 月	災害時アクションカード	災害時アクションカード製作	防災アンケート結果と本校ショート訓練実施指導案を各校に配布 引渡し訓練
11 月	職員防災研修	引渡し訓練反省 職員防災研修	ショート訓練
12 月	避難訓練	チャレンジプランまとめ	伝言ダイヤル体験 職員防災研修（バス乗車時対応）
1 月	一斉指導内容	避難訓練	伝言ダイヤル体験 ショート訓練 避難訓練（起震車体験）
2 月		一斉指導内容	全校集会にてショート訓練実施後振り返り指導
3 月			地震に備えた防災総点検

３．実践したプランの内容と成果

【実践プログラム番号：１】※3

タイトル	防災講演会「肢体不自由児の体験した東日本大震災」
実施月日（曜日）	２０１４年　８月２５日（月）
実施場所	本校会議室
担当者または講師	担当者・講師等の区分：講師 氏　　名：田中　総一郎 所属・役職等：東北大学医学部　准教授
所要時間または「コマ数×単位時間」	２時間　当日の準備・片付けが他に１時間
プログラムの　カテゴリ、形式※4	１・３
活動目的※5	３・６・７・８・９
達成目標	震災時の肢体不自由児・者の状況を知り、今後の防災対策に生かすことができる
実践方法・進め方（箇条書きまたはフロー）	講師による講演会　１時間半 手動吸引器・足踏み式吸引器の体験３０分
準備、使用したもの ・人材 ・道具、材料等	手動吸引器　足踏み式吸引器　プロジェクター　マイクアンプ等
参加人数	１００人
経費の総額･内訳概要	４万１０００円　　謝金　４万円　交通費１０００円
成果と課題	【成果】 事前にいかに備えをしておくかが大切。ヘルプカードや地域に働きかけることの大切さを参加者に知ってもらうことができた。実際の体験からの話なので感じるものが多かったようだ。 【課題】 実施時期の検討。もっと色々な人に話を聞いて欲しかった。
成果物	今年度のまとめに掲載

※3　本報告書に掲載するプログラム数に制限はありません。また、1 つのプログラムの記載ページ数、各項目の字数等の制限はありません。ただし、枠線の中に記載し、改ページ等は適宜挿入してください。
※4　別紙「記入上の留意点」の3．項目から選択し、記入してください。（複数選択可）
※5　別紙「記入上の留意点」の4．項目から1つ選択し、記入してください。

【実践プログラム番号：２】※3

タイトル	防災体験プログラム　　防災スタンプラリー
実施月日（曜日）	２０１４年8月２５日（月）
実施場所	本校（会議室および体育館）
担当者または講師	担当者・講師等の区分：担当 氏　　名：齋藤　朝子 所属・役職等：本校　防災部
所要時間または「コマ数×単位時間」	３時間　当日準備および片付けに２時間弱
プログラムのカテゴリ、形式※4	１・１３
活動目的※5	１・２・４・５・６・７・８・９
達成目標	災害時における車椅子の困難さを疑似体験することで事前の準備、対応について考えることができる。
実践方法・進め方（箇条書きまたはフロー）	・避難所に来た、と言う想定で受付を行う。名簿に記入 ・防災スタンプラリーを家族（ボランティアや必要に応じて教員の手伝い等）で体験する。（ガラス飛散体験、防災ゲーム、炊飯袋体験、非常食試食、水消火器体験、発電機体験、伝言板体験、避難所体験、災害用トイレ試乗、炊き出し体験、防災教材、資料体験等） ・各ブースを教員が担当する。事前に割り振りはあったが、仕事内容は当日まで知らず、指示の書かれたメモを頼りに各自の判断で行動する ・分からないこと、当日の連絡は放送を入れず（災害時なので放送は使えないという設定。ただし冷房は会議室のみ使用可能）伝言板を使用する。当日の指示も伝言板で行った ・炊き出し、水消火器は防災士、消防士に指導してもらう ・炊き出しを実際の食事の時間に合わせるため、夕方の配食で５時から実施した ・車椅子を押しながら炊き出しを受けることや、ガラスに見立てたペットボトルの道を足元に注意しながら周りも気にして通ることの難しさを体験してもらうため極力教職員は手伝わないようにした ・災害用トイレは市販品も展示したが、トイレ用のテントが車椅子では入りにくいことを体験してもらった。また、身近なもので製作可能だという見本のために段ボールや発表スチロールのトイレを作成し、試乗たいけんしてもらった ・米を研がずに炊けるという炊飯袋を用いて炊飯体験を行った ・どのようなものが炊き出しでは食べられるか、また再調理する必要があるか確認してもらうために、再調理等、極力保護者が行い、教職員は必要に応じて支援を行うようにした ・全員で炊き出しのカレーを食べながら振り返りの会を行う ・気づいたことや感想を発表してもらう ・ＰＴＡ会長が石巻で被災した親戚の話を元に地域のつながりや事前の備えについて話をしてまとめとする

準備、使用したもの **・人材** **・道具、材料等**	・人材　ＮＰＯ法人防災士会埼玉支部、日高市役所、高萩分署、埼玉県防災学習センター、埼玉県「いつでもどこでも炊き出し訓練応援隊」 ・道具、材料等　段ボール、発砲スチロール、防災ゲーム一式、ペットボトル、非常食、炊き出し用道具、食器等、紙、ペン、防災教材資料（本、紙芝居、防護用帽子、ヘルメット、写真パネル）、水消火器、火の的あて、受付名簿、日報等記録関係、会議テーブルなど
参加人数	１３０人
経費の総額･内訳概要	総計：２１５１２円 交通費：４０００円　食費：６５４７円　材料費：９８７７円 郵送費：１０８８円
成果と課題	【成果】 実際に体験することで災害についてイメージを持ちやすくなったようだった。実施後早速行動に移した保護者もいる。参加者の多くは実施の効果を評価し、来年度も継続することを希望している。 【課題】 本校の児童生徒は夏の暑さに弱く、体調管理が難しい。今回の中で災害時に電気が使えない設定、とあり、冷房が一部しか使用できなかった。そのため暑い体育館での活動に不安を感じ、参加者が思ったより増えなかった。開催時期を検討した方がいい。 　また初めての実施のため検討事項が長引いてしまい、地域の広報誌に載せることができなかった。また、ボランティアの受け入れなども初回なので様子を見てしまったが多くの人に参加してもらう有効性を感じたので、来年度以降は広く参加を募集していきたい。
成果物	今年度のまとめに掲載

※3　本報告書に掲載するプログラム数に制限はありません。また、1 つのプログラムの記載ページ数、各項目の字数等の制限はありません。ただし、枠線の中に記載し、改ページ等は適宜挿入してください。
※4　別紙「記入上の留意点」の3. 項目から選択し、記入してください。（複数選択可）
※5　別紙「記入上の留意点」の4. 項目から1つ選択し、記入してください。

【実践プログラム番号：３】※3

タイトル	ショート訓練
実施月日（曜日）	５月・６月・７月・９月・１１月・１月・２月の設定期間の１週間のうちの各１日。 日程を知らせずシークレットで実施。 １日に２回実施したこともある。 登校時間、下校時間、給食指導中、授業中など。
実施場所	本校
担当者または講師	担当者・講師等の区分：担当者 氏　　名：横尾　貴史・手島　大介・山家　達朗 所属・役職等：防災部
所要時間または「コマ数×単位時間」	５分
プログラムのカテゴリ、形式※4	１６
活動目的※5	４・７・８・９
達成目標	緊急地震速報を聞いて、自分または教職員と一緒に身を守るための適切な行動をとれたか
実践方法・進め方（箇条書きまたはフロー）	・緊急地震速報が流れる ・児童生徒は緊急地震速報を聞いたら自分で、または教職員と一緒に「落ちてこない」「たおれてこない」「いどうしてこない」安全な場所へ移動する ・自分または教職員と一緒に頭を守る姿勢をとる。または防災頭巾やクッション等で頭部を保護する。 ・音を聞いても驚かず落ち着いて行動をとる。または支援を受け入れる。 ・１分後、訓練であった放送を入れる。「緊急地震速報は怖い音ではなく、地震の前に安全な姿勢をとるためのもので、みんなを守ってくれる音」であることを伝える。 ・その時の行動を振り返り、事後学習につなげる。
準備、使用したもの ・人材 ・道具、材料等	緊急地震速報訓練キット ラジカセ 放送担当者（教頭） 防災頭巾、ヘルメット、毛布、クッションなど
参加人数	本校児童生徒および教職員
経費の総額･内訳概要	総計：１８３１円　　教材費（指導用の絵本）１８３１円
成果と課題	【成果】 ショート訓練を通じ、いつ・どこでも災害が起こる可能性があることに気づき、そのために事前に備える、とりくむ必要性を理解することができた。実際に地震が起きたときも混乱もなくスムーズに対応することができた。積み重ねによりこれまで帽子を被ることが苦手だった児童が、周りを見て自分から頭巾を被るようになったり、自分の頭巾を取る際に車椅子の友達の分をとって手渡したり、近くに身を守るものがないので教職員に代用品を取ってもらったりする

	など、自分達で考えて行動することが少しずつみられている。 【課題】 日程を言わないことで事前の指導時間が十分とれないこともあり、指導せずに実施してしまうこともあった。また、１週間のうちの１日または２日実施したが、他の部署の要望などから行事などを避ける傾向にあり、シークレットだが予想がついてしまうこともあった。そのため、今後はあえて日程を示してしっかり事前事後指導を計画してもらうことや、結局準備をしたものの行わない、「災害がこないこともある」ことを知るなど、実施内容を検討していく必要がある。 　また、医療的ケア実施中の対応については、検討することがあるため、今後の課題になっている。
成果物	今年度のまとめに掲載　ショート訓練実施計画　事前指導案

※3　本報告書に掲載するプログラム数に制限はありません。また、1 つのプログラムの記載ページ数、各項目の字数等の制限はありません。ただし、枠線の中に記載し、改ページ等は適宜挿入してください。
※4　別紙「記入上の留意点」の3. 項目から選択し、記入してください。（複数選択可）
※5　別紙「記入上の留意点」の4. 項目から1つ選択し、記入してください。

【実践プログラム番号：４】※3

タイトル	避難訓練
実施月日（曜日）	５月２１日（水）　１月２３日（金）
実施場所	本校
担当者または講師	担当者・講師等の区分：担当者 氏　　名：横尾　貴史・手島　大介・山家　達朗 所属・役職等：防災部
所要時間または「コマ数×単位時間」	９０分　１０時２０分～１１時５０分
プログラムの　カテゴリ、形式※4	１６
活動目的※5	４・５・６・７・８・９
達成目標	災害の際の知識と対処の仕方を学ぶことができる
実践方法・進め方（箇条書きまたはフロー）	・緊急地震速報が流れる ・身を守る行動をとる ・安全な場所で待機 ・火災発生 ・消防署へ通報 ・初期消火 ・担任等による避難誘導 ・点呼、安否確認 ・一斉事後指導 消防署の方の指導講評 校長の話し 防災学習　「避難の際の約束」 「水消火器による消火体験」 「起震車体験（緊急地震速報が聞こえてから揺れるまでの行動を確認する）」 保健安全委員会より避難の標語の発表
準備、使用したもの ・人材 ・道具、材料等	（人材） 高萩分署消防士 （道具・材料） 緊急地震速報訓練キット ラジカセ 本部ＢＯＸ ヘルメット 防災頭巾 毛布等 起震車 水消火器 火の模型　水消火器用的あて
参加人数	本校児童生徒および教職員
経費の総額･内訳概要	総額：６４１０円　　資材費（水消火器用的あて）：６４１０円

成果と課題	【成果】 ・当日は雨だったため、体育館へ避難場所を変更した。ガラスに見立てたペットボトルを廊下に撒いたことで、足元にも注意をした方がいいことが分かったようだった。 ・また、廊下に障害物を置いてスムーズに避難できないようにしたが、水消火器練習用の火の的だったため、火事が廊下で発生したと勘違いされ、体育館前の道が混乱し、体育館から一番遠く、本来火災現場に一番近かった小学部の児童が避難に遅れてしまった。このことから、火災に限らず地震発生時も「避難路がふさがれてしまうと車椅子の避難はより困難になる」ことが分かった。その後避難の前には担当が校内および外の避難経路上が安全かどうか確認をとる、という動きを新たに加えることができた。 ・体育館で事後指導を行った。雨のため５月は起震車を呼ぶことができなかったが、緊急地震速報の音を流し、高等部の生徒が中心になってその時に取った行動を前に出て発表してもらった。それぞれ上は見るが下は見ない、前は見るが後ろは見ない、など課題があったので指摘し、みんなで気をつけるように指導した。その後、発表した生徒は地震の時の対応について考えるようになり、廊下に掲示してある避難の約束のイラストを見て「今〇〇（例：校内実習中）地震が起きたらどうしよう」と友達や教員と話をするようになった。 【課題】 ・５月の実施の時は雨だったので起震車体験は１月に延期になった。どのような対応がとれるか、またその際に明らかになった課題については今後検討していく必要がある。 ・児童生徒がスムーズに避難出来ないために、ガラスに見立てたペットボトルや障害物の設置計画だったが、火の的を置いてしまったために火災が複数個所で発生したと勘違いされ、他の場所に避難しようとして混乱してしまった。教材の工夫が必要である。 ・水消火器体験が雨でできなかった。８月の防災体験プログラムでは実施したが、１月は季節の関係で実施できなかった。来年度は温かい時期の実施の際に行えるようにしたい。
成果物	水消火器体験用消火練習の火の的（沈下すると倒れて「消えました」の表示が見えるようになり、児童生徒にも分かりやすい。

※3　本報告書に掲載するプログラム数に制限はありません。また、1 つのプログラムの記載ページ数、各項目の字数等の制限はありません。ただし、枠線の中に記載し、改ページ等は適宜挿入してください。
※4　別紙「記入上の留意点」の3. 項目から選択し、記入してください。（複数選択可）
※5　別紙「記入上の留意点」の4. 項目から1つ選択し、記入してください。

【実践プログラム番号：５】※3

タイトル	引渡し訓練
実施月日（曜日）	１０月２２日（水）
実施場所	本校
担当者または講師	担当者・講師等の区分：担当 氏　　名：横尾　貴史・手島　大介・山家　達朗 所属・役職等：防災部
所要時間または「コマ数×単位時間」	２時間
プログラムのカテゴリ、形式※4	１・８・１６
活動目的※5	４・５・６・７・８・９
達成目標	・児童生徒は、災害が発生した場合の身の守る方法を知り、避難から引渡しまでを教員の指示を受けながら安全に、かつ落ち着いて行動することができたか。 ・安全が確認できるまで校内待機をするため、校内の安全な場所を確認する。自立活動室を第一次避難場所とし、校舎内を安全に避難誘導し、保護者引渡しまで保護できる場所であるかを確認できたか。 ・通常の駐車体制で保護者に学校へ迎えに来てもらい、車の走行経路を確認しながら安全に引渡すことができたか。 ・緊急時対応票や引渡しカードを使用した引渡しを行い、その手順の確認できたか。
実践方法・進め方（箇条書きまたはフロー）	・引渡し訓練に参加しない児童生徒は通常下校 ・１５時に緊急地震速報が鳴る ・児童生徒、教職員共に身を守る行動をとる ・校内の安全な場所に待機 ・担当が校内外の緊急点検を行い、結果を災害対策本部に報告する ・避難経路が危険でかつ校内の安全が確認されたので自立活動室に避難する指示を本部長が出す ・防災袋を持って自立活動室に避難する ・点呼、安否報告を行う ・２次避難場所の予定の体育館が点検の結果危険だと判断し、このまま自立活動室で待機、保護者に引渡しを行うことを決定する ・引渡し訓練を開始する旨を指示する ・待機する間、防災部が児童生徒に事後指導。「防災袋の中身を確認しよう」と言う内容 ・当日は雨天だったため、濡れないように駐車場所と台数を制限したため敷地内で待機している車が大渋滞になる ・降雨の状況からその都度引渡し場所の車の台数を２→４と増やしていく ・引渡しカードを忘れた家庭が多かったため、予備のカードに記入してもらうことに。その時間も余計にかかってしまう ・予定より４０分オーバーして終了

準備、使用したもの **・人材** **・道具、材料等**	・緊急地震速報訓練キット ・ラジカセ ・児童生徒拡大名簿 ・本部ＢＯＸ ・ロールシート　ビニールシート（絨毯の汚れ防止） ・トランシーバー（駐車場係と本部との連絡用） ・駐車場係ゼッケン ・車誘導用のカラーコーン ・救護用避難持ち出しセット ・医療的ケア用避難持ち出しセット
参加人数	本校教職員
経費の総額･内訳概要	０円
成果と課題	【成果】 ・これまでにない悪条件（雨・車の誘導が難しい職員の駐車が通常で道路が狭くなっている）で実施した。４０分オーバーし、保護者には多大なる迷惑をかける結果となったが、災害時はこのような混乱が起る可能性がある、ということに気づけたことはある意味成果であると考える。 ・保護者の迎えは車が中心になると思われる。一斉に迎えに来ることは道路状況から難しいと考えられるが、最悪の状態を想定しておくことが必要になる。そのような場合の車の誘導方法を検討すること、引渡しカードの見直し、緊急時対応票の見直し、引渡し方法の確認を改めて行う必要が明らかになった。引渡しカードについては素材や形式についてもう一度見直し、作成予定である。 ・新年度に家庭用防災マニュアルと共に災害対応についてはプリントを配布していたが、保護者会等で実際に説明した方がいい、という意見が多かった。 ・多くの問題はあがったが、そこから改善する点が明確になったことは実施の成果である。 【課題】 今後の課題でまだ検討する必要がある点としては ・学校災害対策本部としての指示連絡系統がはっきりしない ・引渡し場所の検討 ・避難場所の検討（自立活動室は狭い）複数設定しておく ・車の誘導方法について ・体調不良者がいた時の対応
成果物	今年度のまとめに掲載

※3　本報告書に掲載するプログラム数に制限はありません。また、1 つのプログラムの記載ページ数、各項目の字数等の制限はありません。ただし、枠線の中に記載し、改ページ等は適宜挿入してください。
※4　別紙「記入上の留意点」の3. 項目から選択し、記入してください。（複数選択可）
※5　別紙「記入上の留意点」の4. 項目から1つ選択し、記入してください。

【実践プログラム番号：６】※3

タイトル	第１回職員防災研修
実施月日（曜日）	４月１７日（木）
実施場所	本校
担当者または講師	担当者・講師等の区分：担当 氏　　名：齋藤　朝子 所属・役職等：防災部
所要時間または「コマ数×単位時間」	２時間
プログラムの　カテゴリ、形式※4	１７（研修）
活動目的※5	２・４・６・７・８・９
達成目標	・校内図を元に危険個所を知り、災害時に注意することを全員で確認することができたか。 ・防災マニュアルの読み合わせを行い、災害時の対応について確認できたか。
実践方法・進め方（箇条書きまたはフロー）	・４月に改訂された防災マニュアルの読み合わせ 震度５弱でレスパイトには引き渡さない確認 福祉避難所の協定により、本校は避難所になることの確認 在校時の基本的な対応 バス乗車時の対応 校外学習時の対応など ・非常持ち出し袋と緊急時の薬の扱いについて ・本年度の災害対策組織一覧と休日夜間の動員計画の確認 ・校内ＤＩＧ 指導グループ毎に座り、校内図を元に避難経路の確認、消火栓や防火扉の位置の確認する 危険な場所や気になることを付箋に書き出して校内図に貼る それぞれ理由を話し合い、可能ならばその対応策も考える 危険な場所をそれぞれ発表してもらう ・アンケートを記入して終了
準備、使用したもの ・人材 ・道具、材料等	拡大校内図１２枚 付箋 ペン
参加人数	本校教職員
経費の総額・内訳概要	０円

成果と課題	【成果】 ・新年度が始まったばかりで新転任の教職員が本校の災害対策について確認することができた。また、校内ＤＩＧを行ったことで、本校の危険な箇所が思ったより多いこと、そして車椅子の児童生徒にはどのような危険が考えられるかについて指導学年、グループ単位で共通理解を図ることができた。やってよかった、という声が多く上がった。 ・発表した結果をまとめ、校内図に落とすことができた。職員室に貼りだしたところ、管理職がよく見ていてそこに書かれていた「廊下の植木鉢は地震のときに落ちてくるから危ない」という項目からすぐに滑り止めマットを用意してくれた。地震対策と校内美化の両立してくれた例になった。 【課題】 ・全校に関わることや医療的ケアの対応など、すぐには対応できないこともあり、明確な回答ができないこともまだ残っている。 ・本校は出口が南側にしかなく、他の場所に出口が必要だが、土地の所有者の関係もありなかなかすぐには改善しないことも残っている。 ・ＤＩＧのやり方を知らない人が多く、付箋に細かく書いてしまって地図に貼り出す際に苦労したり、意見がでにくいグループが出たりするなど、分かりやすい説明をする必要があった。
成果物	校内ＤＩＧまとめ（掲示用　配布用）　今年度のまとめにも掲載

※3　本報告書に掲載するプログラム数に制限はありません。また、1 つのプログラムの記載ページ数、各項目の字数等の制限はありません。ただし、枠線の中に記載し、改ページ等は適宜挿入してください。
※4　別紙「記入上の留意点」の3．項目から選択し、記入してください。（複数選択可）
※5　別紙「記入上の留意点」の4．項目から1つ選択し、記入してください。

【実践プログラム番号：７】※3

タイトル	第２回　職員防災研修
実施月日（曜日）	８月２９日（金）
実施場所	本校
担当者または講師	担当者・講師等の区分：担当 氏　　名：齋藤　朝子 所属・役職等：防災部
所要時間または「コマ数×単位時間」	２時間
プログラムのカテゴリ、形式※4	１７（研修）
活動目的※5	４・５・６・８・９
達成目標	・児童、生徒の在校時に災害が発生した場合を想定した対応について確認できたか。 ・　校内待機を想定した対応について確認できたか。 ・児童生徒に日常的に防災への指導に繋がる方法を冠がることができたか。
実践方法・進め方（箇条書きまたはフロー）	・雷と竜巻の対応について（埼玉県教育委員会から出ている竜巻対応マニュアルを元にパワーポイントを使って説明する） ・児童生徒へ身の守り方について大切にしたいこと、指導したいことを学年・グループ等で検討し、発表する。 ・防災教材紹介 ・演習についての説明 （詳細は防災マニュアルの在校時の対応参照） 「校内待機で引渡しを行う際の対応について」 【想定】９月のある金曜日の午後２時。千葉県沖にて震度６強の地震発生。 日高市は震度５強を観測。 すぐに身の安全を確保し、指示が出るまで校内の安全な場所で待機。防災部・救助係が校内・避難路を中心に安全な場所を確認し、校外・体育館は危険と判断したので自立活動室に避難。保護者引渡しまでその場で待機する。 〔演習〕 ①　大地震発生！ →「落ちてこない」「倒れてこない」「移動してこない場所」を見つけて頭を守る等、初期対応をする ②　素早く校内の簡単な点検、避難経路の安全を点検し、管理職に報告する（防災部）。救助係は校内の点検も兼ねる。 ③　避難指示の後、自立活動室へ避難する。管理職に人数を報告。 →防災部を中心にブルーシート、ロールシートを絨毯に敷いて車椅子が入れるような体制を作る。 →避難経路にガラスが飛散している、教室のドアが開かないなどの想定をつくり、どのように避難するか検証する。可能な限り防災袋を持ち出す。

	④　安否報告（担任→学部主事→管理職） ⑤　校長の指示により、授業中断、保護者引き渡しになる。 ・３６５日ネット配信（教頭・防災部） ・搬出は校長の指示の後。水・トイレ等を搬出、設営。搬出係だけでなく学部からも応援。 ⑥　終了後、災害時組織班毎に反省・課題点をまとめる
準備、使用したもの **・人材** **・道具、材料等**	・本校防災マニュアル ・埼玉県教育委員会「学校防災マニュアル～竜巻から児童生徒の安全を守るために～」 ・ブルーシート　ロールシート ・台車　毛布　オムツ　水 ・救護用避難持ち出しセット ・医療的ケア用避難持ち出しセット ・本部ＢＯＸ
参加人数	本校教職員
経費の総額･内訳概要	０円
成果と課題	【成果】 ・本校に起る可能性のある災害は地震だけでなく竜巻もあることを確認できた。県内で起きた時の資料をスライドで見せたことで危険性を理解し、在校時に発生したらどのように対応するか、各自が考えて発表することができた。動きは多少違いがあるが、頭を守ることが大切なのは地震も竜巻も同じであることに気づくことができた。 ・これまでに防災部からショート訓練の指導案を出していたが、本校の実態に合わなかった。この研修で自分達の担任している児童生徒の様子からどのような指導ができるか、または教職員がどのようなことについて気をつけるか共通理解することができた。 ・体育館の改修工事をきっかけに今回初めて校内待機想定の避難訓練の演習を行った。児童生徒がいないときの演習のため、気づいたことをその場で意見を出し合うことができた。 ・この研修で出し合った意見をまとめ、２学期のショート訓練の際に指導する点を各学年グループに確認してもらった。指導内容が明確になったため、各自工夫し、実施しやすくなったようである。また、２学期以降の教科学習に組み込んでもらい、様々な授業実践を行うことができた。 【課題】 ・児童生徒の実態によっては「防災教育について指導することができない」と考える教職員がまだ多かった。特別な指導をするイメージが強いようなので今後取り組みやすいような指導内容を提案していく必要がある。
成果物	今年度のまとめに掲載 本校児童生徒に災害時付けさせたい力　９つの視点から

※3　本報告書に掲載するプログラム数に制限はありません。また、1 つのプログラムの記載ページ数、各項目の字数等の制限はありません。ただし、枠線の中に記載し、改ページ等は適宜挿入してください。
※4　別紙「記入上の留意点」の3. 項目から選択し、記入してください。（複数選択可）
※5　別紙「記入上の留意点」の4. 項目から1つ選択し、記入してください。

【実践プログラム番号：８】※3

タイトル	第３回　職員防災研修
実施月日（曜日）	１２月２４日（水）
実施場所	本校
担当者または講師	担当者・講師等の区分：担当 氏　　名：尾川　周平・齋藤　朝子 所属・役職等：スクールバス部部長・防災部
所要時間または「コマ数×単位時間」	２時間
プログラムのカテゴリ、形式※4	１７（職員研修）
活動目的※5	４・５・６・８・９
達成目標	下校後に災害が起きた時のスクールバス支援方法および校内の動きについて確認することができる
実践方法・進め方（箇条書きまたはフロー）	・本校の防災マニュアルを元にスクールバス使用時の対応について確認する ・今回の演習の流れをバス部長から説明する ・１２月１３日の午後１５時１０分を想定し、演習を開始する ・東日本大震災規模の地震が発生する ・担当が校内外を緊急点検し、異常の有無を報告する ・校内に児童生徒が残っていないか確認しながら全職員、職員室に集合する ・学校災害対策本部を職員室に立ち上げる ・スクールバス部が各バスに連絡をし、状況を確認する ・バスと連絡が取れないという想定で、バスの乗車確認およびバス支援班を編成する指示を本部長が出す ・児童生徒の防災袋を持参してバスホールに集合する ・バスホールに集合し、児童生徒の乗車状況を各バスの担当に報告する ・バスを利用していない保護者送迎やレスパイト利用者は学部主事に報告する ・それぞれの報告を対策本部にする ・地震発生時間からバスの場所を想定する。その近くの待機場所を割り出す。地域に詳しい人、配慮が必要な児童生徒の担任など各バス３名程度の支援班メンバーを決定する ・車で出かけるため、配車準備 ・防災担当が支援班用の荷物を倉庫から搬出する ・各支援班の車に荷物を積み込む ・各支援班の用意ができた報告をし、本部長から出発の指示をもらう ・バスを利用していない児童生徒の担任は可能な限り連絡をとる ・その結果を学部主事に行う ・連絡が取れたら各教室の安全点検簿を持参の上点検し、その結果を対策本部にいる防災部長に報告する ・防災部長は校内図に報告された事項を記載する ・各バス、学部で反省を行う

準備、使用したもの **・人材** **・道具、材料等**	スクールバス名簿、運行表、バスルート地図 支援班用毛布、水、オムツ等 支援班用薬、救急バック等
参加人数	本校教職員
経費の総額・内訳概要	0円
成果と課題	【成果】 ・これまで課題となっていた「スクールバス支援班編成」について実際に動いて確認することができた。マニュアルに書かれていると分かりにくいが、実際に動くとイメージがつきやすいという声が多く上がった。 ・支援班用に持ち出す必要があるものが何か明確になった。 ・災害時アクションカードを使用し、学校災害対策本部の動きが分かりやすくなった。当日は校長が不在だったため、本部長を教頭が代行したが、大きな混乱もなくアクションカードを見て指示を出すことができた。 【課題】 ・連絡用にトランシーバーを使用したが、使い慣れていないとスムーズに連絡をとることができなかった。また普段の置き場所が分かりにくいため、災害時に備えて置き場所を検討する必要がある。 ・人数が多いため学校災害対策本部用に腕章を使用したが、もっと目立つゼッケンなどを使用した方がいい。 ・指示を出す人の声が通るよう、拡声器なども使用した方がいい。 ・支援班を編成する基準、またバスが停車する基準などを明確にしておく必要がある。バスは動いてしまう可能性もある。 ・車で支援班が向かうことになっているが、自転車なども用意した方がいいのではないか。
成果物	今年度のまとめに掲載

※3　本報告書に掲載するプログラム数に制限はありません。また、1 つのプログラムの記載ページ数、各項目の字数等の制限はありません。ただし、枠線の中に記載し、改ページ等は適宜挿入してください。
※4　別紙「記入上の留意点」の3．項目から選択し、記入してください。（複数選択可）
※5　別紙「記入上の留意点」の4．項目から1つ選択し、記入してください。

【実践プログラム番号：９】※3

タイトル	小学部　家庭科「安心安全なくらし」
実施月日（曜日）	９月１７日（水）　１０月１日（水）　１０月１５日（水）
実施場所	小学部教室
担当者または講師	担当者・講師等の区分：担当者 氏　　名：齋藤　朝子 所属・役職等：防災部　小学部
所要時間または「コマ数×単位時間」	４５分×３コマ
プログラムの　カテゴリ、形式※4	５
活動目的※5	５・６・７・８・９
達成目標	地震の時の対応について理由と共に理解することができる。 災害時に必要なものを考え、用意することができる。 非常食を実際に食べて、普段の食事と違いに気づくことができる。 災害時にはどのような食べ物があるといいかについて家族と話し合うことができる。
実践方法・進め方（箇条書きまたはフロー）	・９月１日は防災の日。その由来を知る。 ・地震のときにどのように身を守ればいいのか、ワークシートを元に正しい行動を選び、発表する。（校内・校外各１枚ずつ） ・災害時は普段起らないようなことがあるので、その危険性を知ることを伝える。 ・東日本大震災の写真を見て、当時、自分達の生活にどのようなことがあったか思い出す。 ・停電、ガソリンがなかったことなどを思い出した上で、「うさぎ一家の防災荷造り」ワークシートに自分なら非常持ち出し袋に何を入れるか選び発表する。 ・実際に選んだものを袋につめ、背負ってみて重さを感じる。 ・友達の選んだ理由もよく聞き、分からないことがあったら質問する。 ・学校に持ってきている「防災袋」を開けて、何が入っているか答える。自分が選んだものとの違いに気づく。 ・「防災袋」は非常時の食べ物がメインであり、その食品を食べたことがあるか確認する。食べるために何が必要か確認する（水やお湯、缶きり等） ・同じものを用意し、実際に食べられるように調理する。お湯を沸かして入れてみる。缶切りを使ってパンの缶詰を開ける。 ・実際に試食し、普段の食事との違いに気づく。好き嫌いの多い児童についてはどのような味や食べ物なら食べやすいか考える。 ・授業の報告を家庭で行い、災害時にはどのようなものが食べたいか聞いてワークシートに記入する。後日発表する。
準備、使用したもの ・人材 ・道具、材料等	・うさぎ一家の防災荷造り（ワークシート、カードなど） ・地震の時の行動についてワークシート

参加人数	児童２人、教員２人
経費の総額・内訳概要	非常食代４００円程度（学級費）
成果と課題	【成果】 ・東日本大震災のことをよく覚えていて、その時に困ったから必要なものは何かを考えることができた。非常持ち出し袋に入れるものはそれぞれに必要なもので、理由もそれぞれよく考えて発表することができた。友達の選んだものが自分と違うと興味深く話を聞くことができた。 ・家庭で用意した「防災袋」の中身を見る機会はあまりなかったようで興味深そうにしていた。その食べ物を選んだ理由は知らなかったようで「食べたことがない」「〇〇は苦手」だということが分かったため、感想と共に家庭で話し合うように促した。宿題を通じて保護者から「缶切りが必要だとは知らなかった」「苦手な味だったなら他のものにしてみます」などの声を聞くことができた。 ・フリーズドライという保存方法があることを知った。食べなれないがお湯を入れて調理することに興味を持ち、普通のご飯になったことに驚いていた。味も思ったよりは食べられたことで好き嫌いの多い児童にとっても自信になったようである。 【課題】 ・肢体不自由の児童は身の回りのことを大人にやってもらうことが多く、興味があっても「危ないから」と言う理由でこれまでに行ったことがないことが多い。地震の時の行動についてもエレベーターの項目では「とりあえずボタンを全部押してどこかで止めなければ」という児童と「大人から余計なボタンは押してはいけないからそれはやってはいけない」と意見が割れてしまった。同様にブロック塀のそばで地震が起きたら「危ないから離れる」「でも道路に飛び出したら行けないと言われているからそれは駄目だ」と言うことがあった。児童で話し合い、「大人が危ないということは駄目だ」という結論になりかけた。児童の成長の過程でまだ大人の話を絶対にしているところもあるが、身の回りの危険について機会を作って普段から話しておく必要を感じた。
成果物	今年度のまとめに掲載

※3　本報告書に掲載するプログラム数に制限はありません。また、1 つのプログラムの記載ページ数、各項目の字数等の制限はありません。ただし、枠線の中に記載し、改ページ等は適宜挿入してください。
※4　別紙「記入上の留意点」の3．項目から選択し、記入してください。（複数選択可）
※5　別紙「記入上の留意点」の4．項目から1つ選択し、記入してください。

【実践プログラム番号：１０】※3

タイトル	国語劇「真夜中のあんぱん」
実施月日（曜日）	１２月１６日（火）
実施場所	本校体育館
担当者または講師	担当者・講師等の区分：担当者 氏　　名：小池　正之 所属・役職等：高等部教員
所要時間または「コマ数×単位時間」	６時間×５０分
プログラムのカテゴリ、形式※4	４・５・１５
活動目的※5	６・７・８・９
達成目標	災害時に自分達はどのようにしたらいいのか考えることができたか
実践方法・進め方（箇条書きまたはフロー）	・職員研修で該当生徒の災害時につけたい力について考える ・「大人の指示を待たずに自分で考えることができる力」と目標を設定する ・生徒たちに災害時のいくつかの状況を設定し、その中で自分達がどのように動いたらよいか考え、意見を出す ・出てきた意見を元に劇を作る ・高等部のおたのしみ会で発表することを目標に劇の練習をする ・当日発表する
準備、使用したもの ・人材 ・道具、材料等	背景画（模造紙、サインペン、絵の具、筆他） 毛布、防災頭巾、ヘルメット、あんぱん
参加人数	生徒５人　教職員４人
経費の総額・内訳概要	０円
成果と課題	【成果】 これまでの「覚えたことを言う」劇から、「自分達はどうするか」について考え、動くという実践の場になった。 【課題】 劇を作るほうに力を入れてしまった。今後どのように取り組みを継続して考えていけるか。
成果物	今年度のまとめに掲載

※3　本報告書に掲載するプログラム数に制限はありません。また、1 つのプログラムの記載ページ数、各項目の字数等の制限はありません。ただし、枠線の中に記載し、改ページ等は適宜挿入してください。
※4　別紙「記入上の留意点」の3．項目から選択し、記入してください。（複数選択可）
※5　別紙「記入上の留意点」の4．項目から1つ選択し、記入してください。

４．苦労した点・工夫した点

プランの立案と調整で苦労した点工夫した点	・肢体不自由の児童生徒の実態が様々（車椅子の形状や障害の複雑さ、医療的ケアなど）なため、全体を対象にするとどこにも当てはまらずに、ねらいがぼやけてしまった。最初に指導案を作成した時に、熊谷地方気象台のものを単に車椅子の児童生徒を対象に読み替えたのだが、どこに焦点をあてるかはっきりせず、使いにくいものになってしまった。そのため、研修で自分の担任する児童生徒に行う指導を考えてもらったところ、具体的な内容を引き出すことができ、２学期以降の指導に生かすことができた。 ・職員の異動が多く、毎年１／３の職員が入れ替わる本校では、防災教育のねらいについて毎年始めにしっかり確認する必要がある。日高特別支援学校のあるこの地域は大きな災害の経験もなく、これまでの体験から「きっと大丈夫」「なんとかなる」という意識が根強い。防災について取り組む必要性は理解しているが、優先順位が低い。研修や他の地域で起きた地震の話を踏まえながら、夏には竜巻や雷などの災害が発生しやすい可能性を伝え、その対応について研修することで、地震以外の防災対策の必要性を伝えていった。 ・不十分な点も多いが、普通校はもちろん、他の障害種別の特別支援学校と比べても児童生徒に対して支援する教員が多く配当されている。そのため、職員の数も多いので防災教育に対しては児童生徒だけでなく、教職員を対象に行う必要もある。教職員の研修が重要になるが、講義を受けると知識は得られるが、与えられたものは時と共に忘れてしまうことも多い。そこで、ＤＩＧやクロスロード、演習などで実際に体験し、自分達で考え、話し合えるような研修を計画した。 ・これまで教職員は十分な防災教育を受けておらず、経験がないので指導が難しいという意見があった。そのため防災部を中心に参考になる本や防災体験プログラム等でアイデアを伝え、指導に生かしてもらえるようにした。 ・防災体験プログラムでは保護者が参加しやすくなるように、どんなことを体験したいか事前に意見を出してもらった。自由に意見を出してもらい、可能なことを取捨選択して計画を立てた。
準備活動で苦労した点工夫した点	・職員研修で用いる手法について調べたり、実際に研修を受けたりしたが、身近で行っているところが少なくて苦労した。ＤＩＧは消防署などで研修を受けるつもりでいたが、ＤＩＧについて知っている人がいなかった。 ・防災体験プログラムでは保護者から「東日本大震災を体験した、肢体不自由児に関係のある人（例としては特別支援学校の教員）」の話を聞きたい、という要望があったが、誰に相談したらよいか分からず講師選びに苦労した。日程も絞られていたので講師の都合と合わせるのが大変だった。東北の特別支援学校の先生に相談したところ、今回の田中先生を紹介していただいた。日程もたまたま空いている日でスムーズに話が進められた。 ・また、防災体験プログラムは今回初めて計画した。本校では課業日以外に保護者が参加する行事を行っておらず、その企画や準備などが手探りの状況だった。ボランティアを募集するために社協を訪れたが、そのような依頼をこの数年間受けたことがない、として驚かれたがとても歓迎された。実施時期も夏休みだったため、市役所の担当なども地元の防災訓練の準備で忙しく協力することが難しかった。協力してもらえる形を何度も相談して調整することに苦労した。

	・炊き出しについても初めてだったので手探りだったが、埼玉県の「いつでもどこでも炊き出し応援隊」に依頼し、場所や献立のアドバイスを受けた。その後、食材（米）やガスの提供を受け、使用方法等指導してもらうことができた。災害時の炊き出し場所の参考になった。 ・避難訓練では起震車体験を行う計画を立てていたが、車椅子の人は利用が難しく、大きな消防署や防災学習センターでの体験を薦められた。それでは全員が見たり、体験したりすることができないため、消防署の方に学習の必要性を伝えて協力してもらうことができた。
実践に当たって苦労した点工夫した点	・防災体験プログラムは残暑厳しい時期で参加者の体調管理が心配された。そのための冷房の部屋の確保など準備をしていたが、当日は雨が降ったため涼しく過ごせた。野外での炊き出しが難しくなり場所を変更した。教職員は夏季休業中のため、当日の朝全員が初めて打ち合わせをすることになったが、災害時を想定しあえて細かい打ち合わせをせず、担当だけ伝え、あとはそれぞれの場所に仕事内容の書かれた紙を貼りだして各自に考えて動いてもらうことができた。 ・指導案は最初に提示したものでは重度の児童生徒には内容が難しく、軽度の児童生徒にとっては学習時間確保のため、わざわざ取り組めなかった。防災研修によって課題を明確にしてもらったところ、各学部で実践するところが増えた。朝の会や自立活動で指導した重度のクラスもあった。 ・ショート訓練を繰り返すことで、児童生徒教職員共に災害時にどのような動きをすればいいか分かってきて身についてきたようだ。日程をあえて言わず「いつ起こるかわからない」という緊張感を持ってもらうことができた。今年度のショート訓練期間中、２回比較的大きい地震が起きたが、混乱もなくそれぞれが身を守る行動を取ることができ、成果を実感することができた。日程を言わないことで事前の指導時間が十分とれないこともあり、今後検討していく必要がある。 ・職員研修後、各自の意見を忘れないようにすぐにまとめ、職員室に貼りだした。それをみながら研修のときとは異なった教員同士で話をするきっかけになり、保護者や来校者用に防災部コーナーにも掲示することができた。また、指導方法については実態毎に意見をまとめ、ショート訓練期間前に新たに作り直した指導案と共に配布し、自分達が指導することを再確認することができた。 ・各取り組みの後の防災部便りには保護者にも報告し、本校の取り組みを共通理解できるようにした。引渡し訓練の際は車が殺到して混乱し、訓練に対して保護者からの苦情もあったので、どのようなねらいで訓練を計画し、なぜ混乱したのかについて分析したものを反省としてすぐに報告したので、主旨を理解してもらえたようだった。

５．他の団体、地域との連携

協力・連携先の分類	団体名、組織名	協力・連携の内容
学校・教育関係・同窓会組織	県内肢体不自由児校 埼玉県立　熊谷特別支援学校 越谷特別支援学校 和光特別支援学校 川島ひばりが丘特別支援学校 宮代特別支援学校 さいたま市立ひまわり特別支援学校 さくら草特別支援学校	防災アンケートの協力（防災教育の現況調査）
保護者・ＰＴＡの組織	ＰＴＡ本部役員 ＰＴＡ防災担当（役員内）	防災体験プログラム企画
地域組織		
国・地方公共団体・公共施設	日高市　危機管理防災課 埼玉県防災学習センター 日高市社会福祉協議会 狭山市社会福祉協議会 埼玉西部広域消防本部埼玉西部消防署高萩分署	非常食の提供 車椅子での被災体験のビデオ撮影、東日本大震災の写真パネル貸出 ボランティア募集・紹介 ボランティア募集・紹介 防災指導・助言 起震車貸し出し等
企業・産業関連の組合等	ＪＡいるま野 埼玉県ＬＰガス協会　西武支部	炊き出し訓練応援隊（米の提供） 炊き出し訓練応援隊（ガスの提供・資材貸出）
ボランティア団体・ＮＰＯ法人・ＮＧＯ等	ＮＰＯ日本防災士会　埼玉支部 ＮＰＯキャンパー	防災体験プログラム助言・指導 炊き出し訓練応援隊（炊き出し方法助言）
職業、職能団体・学術組織、学会等		

６．成果と課題（実践したプラン全般について）

成果として得たこと	・防災体験プログラムを実施したことで、参加者の多くが防災への意識を高め、防災対策の重要さを感じることができた。卒業生でも参加したい、と言う声もあり、今後は就学前施設、卒業後の事業所等への参加募集の声をかけていき、活動を広げられる可能性を感じることができた。 ・参加した教職員からも好評で、２学期以降の授業につなげることができた。それにより体験プログラムに参加できなかった児童生徒にも活動の共有ができた。活動の重要性を理解してもらい、来年度以降も実施の計画である。 ・実態に応じ、授業（教科・領域）で防災について取り組むことができた。知識として地震の仕組みやその時の行動について知り、自分で判断できるような学習を行った。また、防災ゲームや非常食の試食等で楽しみながら知識と共に体験することができた。 ・職員研修で児童生徒につけさせたい力について考えてもらったところ「自分達で考える（大人の指示を待つだけでなく）」という課題の上がった高等部のあるグループでは、２学期の授業で生徒同士の話し合い活動を充実させ「地震が起きた後どうするか」をテーマに劇を作り、学部のおたのしみ会で発表した。 ・ショート訓練を通じ、いつ・どこでも災害が起こる可能性があることに気づき、そのために事前に備える、とりくむ必要性を理解することができた。実際に地震が起きたときも混乱もなくスムーズに対応することができた。
全体の反省・感想・課題	・地域との連携をしていくことがこれからの課題になると思う。近所に住んでいる車椅子の人たちの存在に気づき、災害時にどのような支援をしていくか知ってもらうことが大切である。そのきっかけとして、市の広報に載せることや、本校のＨＰ等で活動を積極的に伝えていきたい。また防災部だけでなく、校内の各組織との連携をし、ボランティアや外部の人材を活用していく。本校の児童生徒が利用している病院とも連携し、医療と災害対応について情報交換しながら取り組んでいきたい。 ・ショート訓練の成果は出てきたが、回数を多く設定したことである意味の「慣れ」が見られた。また、いつ起こるかわからないという「ショート訓練実施週間」の計画のため、各学年グループで計画的に事前事後指導の準備や実施を行うことができなかった。 ・継続した取り組みにより、児童生徒それぞれのペースで防災への意識が育ちつつある。今年度は教科指導を中心に実施したので、重度重複障害のある児童生徒たちが自分の力を引き出せるような防災教育の内容作りをしていきたい。無理なく教育課程に組み込めるか学校全体で検討する。 ・様々な想定の研修、訓練で入れ替わりの多い本校でも職員の防災への意識を高めることができた。今後も自分自身の問題として取り組めるような研修内容を検討していく。どのような場面でも対応できるように教職員の役割に沿った動きの確認。防災マニュアルの見直し、災害時アクションカードの活用していく。

今後の継続予定	・防災教育の充実…日常の取り組みが災害時に生かされることを意識した指導。生徒指導部と連携し、児童生徒が主体的に取り組めるような活動作り。 ・防災体験プログラム…地域の人の参加、車椅子の人の参加を募り、ボランティアを入れながら多くの人に防災についての気づきのきっかけ作り。支援方法を知る取り組みを行う。ＰＴＡ防災委員も担当ブースを任せ、保護者の提案する防災についての発表の機会とする。 ・職員の意識向上…研修、訓練の工夫。様々な想定で実施し、そこから出た課題を検討していく。 ・保護者…来年度よりＰＴＡ専門委員会として防災委員会が設置されることになった。より連携して本校の防災対策を考えていく。防災体験プログラム、防災学習会を計画、準備し、保護者の立場から防災への意識作りを発信してもらう。

７．自由記述欄　※6

※6　自由記述欄は、防災教育の実践で得られた知見、防災教育の普及に関わる提案等を盛り込んでください。また、前頁までの記述に不足した事項、参考資料、写真等を自由にご記入ください。なお、3ページ以内厳守でお願いします。

肢体不自由校での防災教育は、その実態から難しいと思われてきた。児童生徒の障害が重度重複化し、教科指導を行う人数よりも自立活動を中心とした人数が多数を占めている現状がある。これまでに本校が防災教育に取り組む中で、先駆的に実践している学校を探すことが難しかったのはそのことも原因であると思われる。

本校の防災教育として取り組むために考えられることは「災害が起きても生きて生き延びること」である。東北大学の田中准教授の言葉でもある。自分らしく生きていくための力を育てている児童生徒にとって、災害時も同様に生きていくために必要な事は日常生活の中にたくさんあり、普段から取り組めることばかりであると思われる。

１．　まず教職員・保護者が「災害が起きても児童生徒たちを守る」という意識を持つ

これまでの取り組みで「災害はいつ起こるかわからないこと」「埼玉県も安全ではない」ことを知ることができた。阪神大震災や中越地震、東日本大震災がそれを教えてくれている。

肢体不自由校は教材教具、自助具、補助具などで多くの備品がある。車椅子だけではなく立位用のプロンボード、座位保持装置など大型な物も多い。それらを整理整頓し、環境を整えていくことが大切である。

職員研修の校内ＤＩＧで新転任の職員でも校内の安全や危険な場所、時間帯を知ることができた。指導単位ごとに災害時の動きを確認することができた。

１．　児童生徒に分かるような防災教育の工夫

児童生徒がどのような状況でも対応できるようにと、ショート訓練に繰り返し取り組んできた。

「音と動きの因果関係」により、災害時でも「落ち着いて行動する」ことや、「頭を守るクッションや頭巾等に慣れる」ことをはじめ、必要な「支援を受け入れる」こと。また「ガラスの割れている道の危険性」を知り、「自分でどのように避難するか考え」たり、周りの人に必要

（自由記述：１／３）

な「支援を頼むことができた」りすることができることができるようになってきた。自分自身の身を守るだけではなく、すぐに動けない友達の防災頭巾を取って渡すなどの「共助」の姿勢も育ってきた。

年度初めの一斉指導や、避難訓練後に全員で振り返ったことでその後も意識して考えることができるようになった生徒もいる。また、実態に応じた指導をすることで周りの雰囲気からどのように行動したらよいか考えられるようになった児童もいる。

まだまだ指導方法は試行錯誤ではあるが、それぞれでできることを教職員が考え実践するようになってきた。防災担当に実践を報告し、それを防災部便り等で保護者や他の教職員に伝え、確認するようにしてきた。また、防災部コーナーもテーマ毎に内容を見直し、児童生徒にいつでも防災について触れられる場所として設定してきた。音が出たりめくって絵が出たりするなど、楽しみながら防災について教職員と共に考えられる場所になりつつある。

３．　日常の積み重ねが大切

災害を経験した人たちの話として「普段行っていないことは災害時にも行うことはできない」と言われる。」普段の指導の中で「人の話を聞く」「落ち着く方法を知っている」「支援を受けることができる」「支援を頼むことができる」「まず自分で考える癖をつける」「周りの状況を知る」などはそれぞれの指導場面でねらいをもっている。

また、登下校のスクールバスの乗車確認を表に記載することは災害時にも生かされることが研修ではっきりした。整理整頓することも、忙しいから後で、と済ませてしまわずに普段から習慣としていけば、災害時に避難路をふさいでしまうこともなくなる。外の散歩で危ない場所を確認したり、どこに行けば安全か知ったりすることができる。また、近隣の人との交流で災

（自由記述：２／３）

害時に協力できることが出てくるかもしれない。

家庭においても車椅子だから、と地元の活動に参加せずにいればどのような人がいるか知られないため、災害時には必要な支援が来ない可能性もある。近所との交流を進め、人手の必要とする避難時に協力を求めやすい関係にしておくことが重要である。まだまだ自分の家の災害対策（家具の固定や備蓄）が優先しているが、今後は地域との連携にも声を上げていきたいと思っている。

４．　保護者・教職員を巻き込む工夫

本校のある地域は大きな災害がこれまでになかったところである。教職員はもちろん、保護者においても防災への意識はあまりないのが現状だった。東日本大震災の際もあまり被害がなかったので余計に安心しているところもある。その中で１でも書いたが、児童生徒を守るためにも周りの大人達を防災教育に巻き込む必要がある。自分達が行ってきた避難訓練（放送が入って机の下に潜り、指示に従って外に出て整列、点呼をして終了）の経験しかないので、どのように取り組んでいけばいいのか分からない、他にやることがあって手が回らない、と言う状況であった。まず教職員・保護者に関心を持ってもらうために講師を招いて講演会を開催し、災害は他人事ではないことを理解してもらった。次に本校の防災教育で取り組んでいることを防災部便りに書いて毎月発行し、報告した。職員研修や防災について取り組んだ授業の報告、引渡し訓練の反省、自然災害のニュースからどのように対策すればいいかを伝えることもあった。本校が防災について取り組んでいることを知ってもらうきっかけになった。また、防災体験プログラムを保護者と一緒に企画することで「今知りたいこと」について意見を出してもらい、参加しやすい雰囲気作りをすることができた。保護者だけでなく、教職員も参加児童生徒と一緒に楽しんで参加し、「もっと色々な人たちにも参加してほしい」「防災の取り組みは必要だ」と感じてくれるようになった。

竜巻や雷、降雪について注意することを職員に伝えることで、地震以外の対応についても共通理解を図った。研修をただ受けるだけではなくまとめたものを一覧表にして貼りだしたり、指導案に反映させたり、とフィードバックすることで継続した取り組みになるようにした。また、スクールバス部や給食部、生徒指導部の委員会活動、保健部や医療的ケアと連携し、防災について無理なく取り組みや研修を行うことでより充実させることができた。

保護者の意識も高まり「障害のある人の震災の時のＤＶＤを上映会として学校で開催したい」「（他の学習会で取り組んだ）うどんづくりは災害時にも作りやすいみたいだから今度一緒にやろう」と防災への視点で意見や感想を伝えてくれるようになった。避難訓練を見学して車椅子の避難方法についてのアドバイスをいただいた。それを元に埼玉県防災学習センターで車椅子の地震と煙体験の様子を撮影し、職員研修で確認した。実際に映像で見ることで、大きい揺れの時はブレーキをしても車椅子が大きく動くことや、身を低くできないため煙を吸わないようにマスク等の対応を考える必要があることを確認することができた。

（自由記述：３／３）